



アナーキズムの星 大杉魔子

四十四年の一生を人並はずれた辛酸をなめつ
づけたひとりの女性の、内心の困惑をつづる

お 道 雄
ち 谷 千
（演劇評論家）

悪魔の子

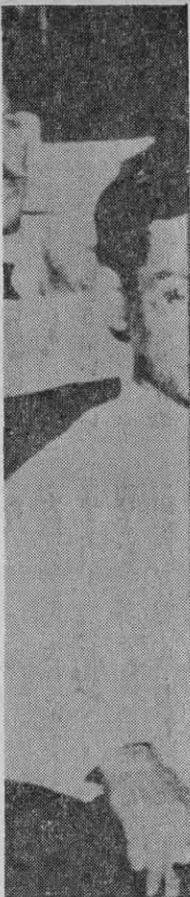
マユよ、独りで泣くのはおよし、
僕も一緒に泣かしておくれ、
パパに、好く似た大きなお目に、
露を宿して戯戯く時は、
僕も一緒に泣かしておくれ、

パパと、ママとが帰らぬ事を、
僕が寝床で話したをりも、
マユよ、お前は頷くばかり、
涙見せない可憐さまに、
僕は腸断つ思ひ

（以下略）

『改造』の大杉栄追想特集に、同志村木源次郎が寄せた詩の一節である。村木はこの詩をマコたちから呼ばれた「ゲンニイ」という愛称で発表している。

マコ——大杉魔子。いうまでもなく大杉栄と伊藤野枝の間の第一子である。野枝は大正六年九月に生れた魔子を頭に、生涯を閉じるまでに五人の子をもうける。大正八年十二月に次女エマ、そしてこの子が生後半年ほどたって大杉の妹松江の嫁ぎ先牧野田の家へ養女



大正十二年七月、パリから帰国する車中で大杉栄・伊藤野枝。中央は魔子

に貰われて行った後、大正十年二月三女同じくエマが生れる。（だから運動家達はこの子を二代目エマと呼んでいる。）翌年一月四女ルイズ、末子の長男ネストルが生れたのは、大杉夫妻が殺害される僅か一月前の大正十二年八月である。

アナーキズムの星 大杉魔子
魔子という名は、大杉自身が書いた言葉によると、「僕等夫婦が世間からあまり悪魔！悪魔！と言われたんで、ついその気になって、悪魔の子なら魔子だというんで」名づけたという。ちょうど「日蔭茶屋事件」の直後で、彼等は世間からも、また多くの同志達からも指弾されていた。エマは野枝が傾倒したエンマ・ゴールドマンに、ルイズはバリ・コムミュンに活躍したルイズ・ミシエルに、それからネストルは大杉が興味を寄せたネストル・マノフ將軍に、それぞれ因んで名づけられた。

敵しい弾圧下にあったから、当時の運動家達が平静的な家庭を営んで子を設けることなど極めて稀であった。一昔前の平民社時代に、堺枯川の一人娘真柄（現在の近藤真柄）がそうであったように、魔子もまた、たちまち大杉の周辺に集まる運動家達皆のマスコットになる。

こんな話を近藤憲二が『思い出すまゝ』に書いている。

大正八年もたいぶおしつまったある日、同志の和田久太郎が三つになるマコを乳母車に乗せて、本郷曙町の労働運動社からおして出た。子守と見せかけて尾行をまいて、彼はそのまま上野桜木町の有吉三吉の家まで行き、有吉の家に預つてあった発禁の大杉の著書『労働運動の哲学』を乳母車の底にぎっしりつめて、何食わぬ顔で労働運動社まで帰って来る。その晩彼は大きな風呂敷包みをかっ

で東京駅へ行った。手荷物預り所まで行った時、果して私服に声を掛けられた。「開ける」「開けない」の押問答の末に、とうとう日比谷署の特高の部屋までつれて行かれて、そこで刑事達は強引に風呂敷包みを解いた。中には布団と汚れた襦が一枚入っていた。

「野郎、うまく引っかけりやがった」
帰つて来て、和田はそういった。「引っかけた」といったのは刑事ではない。近頃とみにうるんに思われていた有吉三吉の方である。有吉は「仲間から破れたゴムマリ同様にうっちゃられた」と近藤は書いている。

大正十一年の末に、大杉は密出国してパリに潜入して捕えられ、獄につながれる。「日本脱出記」には牢獄で魔子を思つてつくった詩が載っている。

魔子よ、魔子

パパは今

世界に名高い

パリの牢やラ・サンテに。

だが、魔子よ、心配するな
西洋料理の御馳走たべて

チヨコレトなめて
葉巻スパスパ ソファの上に。

そしてこの

牢やお蔭で

喜べ、魔子よ

パパは直ぐ帰る。

おみやげどっさり、うんとこしょ

お菓子におおべにキスにキス

踊って待てよ

待てよ、魔子、魔子。

実際には、「西洋料理の御馳走たべて、チヨコレトなめて、葉巻スパスパ」やっていたのは始めの間だけで、金がなくなるとたちまち黒パンと塩汁のようなスープで閉口したらしいのだが、とも角この「お蔭で」、彼は強制送還されて、七月帰国する。八月にネストルが生れ、九月一日の関東大震災の直後、同十六日に甘粕等によって虐殺される。

事件当時の模様を、魔子はこう書いています。

「私が最後に父母と別れたのは、やっぱり他の咄をしてはイケナイよ」と小さい児供に戒めた。……暫らくすると魔子は果して平生の通り裏口から入って来た。家人を見ると直ぐ「パパもママも死んじゃったの。伯父さんとお祖父さんがパパとママのお迎えに行ったから今日は自動車で帰って来るの」といった。お祖父さんというのは……大杉の変事を遠い故郷の九州で聞いて倉皇上京した野枝さんの伯父さん(代筆)である。

茶の間へ来て魔子は私の妻を見て復た繰返した。「伯母さん、パパもママも殺されちゃったの。今日新聞に出てしましよう……」恻怍な魔子は何も彼も承知していた。が、物の弁えも十分で無い七才の子である。父や母の悲惨な運命を知りつゝ、イツモの通り無邪気に遊んでいた……

そしてもう一つ、この間の事情を語る野枝の伯父代筆の手記がある。

「……翌日、軍法会議に出頭し死体引取を了し、午後落合の火葬場へ運びたり。当夜は重なる者集り、四人の遺児の処置や家の始末・葬儀等協議をなし、予年長者の故を以て意見を陳べたるに、予が提説の通り一決し、遺児四人遺骨三人分を携え滞京十三日にして帰途

所へ遊びに行っている時だった。夢中で遊んでいると、父と母が外出の恰好でやっ来てた。横浜で震災に会った叔父達(現在私のいる叔父のところ)が鶴見にいるからこれから行って連れて来るというのだ。何時もの私なら私も一緒にいって父にぶらさがるとは、その時は、遊びが余り面白かったせいか、ママは待っている」といってキャア／＼さわいで遊んでいた。それがとうとう最後だった……

「他所へ遊びに行つて」という他所とは、内田魯庵の家である。大杉が柏木に引越した時、同番地に魯庵が住んでいた。それで大杉は家族を皆引連れて、魯庵の家へ遊びに行つた。そうしているところは、この夫婦は「少しも危険人物らしくも革命家らしくもなかった」と魯庵は書いている。

魯庵の家にも、魔子と同じぐらいの子供達がいた。それで魔子は毎日のように遊びに行つた。

大震災の直後、大杉はルイズを抱き、魔子の手を引いて魯庵を見舞つた。

「ひどい地震だな。家は無事だったかね」

「壁が落ちただけだ。しかし一時は家が潰れ

に就く。此時迄、汽車開通し居らざる為中仙道に廻りたり。……車中の困難名状し能わず、……固より睡眠をなす遑なく辛うじて帰県したり。夫より四児の改名、入籍、就学、葬式一時に処理し、一段落を告げたり」

こうして魔子は母方の籍に入り、伊藤真子と改められる。エマは笑子、ルイズは留意子、ネストルは栄と改名する。栄だけは翌年八月福岡県今宿の祖父の家で夭折する。

甘粕事件の悲劇

「甘粕事件」は、大杉と野枝の他に、大杉の末の妹あやめの一人息子橋宗一をも巻添えにして殺害してしまう。あやめはオレゴン州ポートランドでレストランを経営する橋宗三郎という者の許に嫁ぎ、一子宗一を産んだが、胸を病んで宗一を連れて帰国していた。大震災当時彼女は宗一を兄の大杉勇方に預け、自身は静岡病院で入院療養中であつた。震災で宗一は倒壊家屋の下敷となつたが、自分で這い出して奇跡的に助かった。勇の一家が鶴見に避難していると聞いて、大杉と野枝は宗一を預かってやるつもりで出掛け、三人連れて柏木の自宅へ帰りつく直前に憲兵に拉致され

るかと思つたよ」

互いの無事を喜んだ後で、大杉は「これでどうやら原稿の催促から免れるかも知れない」と笑つたという。

後になつてはそれが全くのデマだとわかつた朝鮮人暴動説が流布された時、今度は魯庵の方が気になつて大杉を見舞つた。大杉は籐椅子に腰掛けて、握り太のステッキをひきよせながら、

「社会主義者が火をつけるっていうから、来たら引つ捕まえてやるんだ」と笑つていた。

「九月十六日の朝九時頃、大杉は野枝さんと二人連れで、二人とも洋装で出掛けるのを家人は裏庭の垣根越しにチラと見た。……丁度遊びに来ていた魔子も後影を見ると周章で、垣根の外へ遊び出したが、すぐ戻つて来て、『家のパパとママよ』といつた。……夫ぎり大杉は姿を見せなかつた」

事件が明るみに出たのは、月も末になつてである。

「朝の食卓は大杉夫婦を知る家族の沈黙の中に終つた。今日も魔子は遊びに来るかも知れないが『魔子ちゃんが出来ても魔子ちゃんのパ

る。

後に軍法会議の公判廷で、甘粕は突然それまでの陳述を覆して「宗一殺しは自分は今全く知りません」と絶叫して、判士長を手こずらせ、世間の驚愕を買う。彼が俄かに前言を翻したのは、宗一がアメリカで生れ、したがつて米国籍であつたこと、そのために米国外務省から抗議が申し込まれたことと、八歳のいたいけな少年を道連れにしたことへの一般輿論の激しい憎しみの集中に恐怖を覚えたからである。

名古屋の寛王山日泰寺の、広大な墓所の一隅に、父惣三郎によつて建てられた橋宗一ハシムネの小さな碑が今も残っている。寺の本堂からは遠く距つた、墓地の中の道を幾度も登つたり下りたりした辺りの、恐らくは近頃までそこは溝川であつたのを埋め立てた側溝の、大きく折曲つた角のところに、この碑はある。

Mr. M. Tachibana

Born in Portland Ore.

12th 4 1917 U.S.A.

吾人は

須らく愛に生べし

愛は神なればなり 橋宗一

この碑の裏には、長い風雨に曝されて消えかかった次のような文字が刻まれている。

宗一（八歳）ハ再渡日中東京大震災ノサ
イ大正12年（1923）9月16日ノ夜大杉榮野
枝ト共ニ犬共ニ虐殺サル

Build at 12th 4 1927

by S. Tachibana

なでし子を

夜半の嵐にたおられて

あやめもわかぬものとなりけり

楠惣三郎

惣三郎は吾が子の生後九十年たった誕生日を運んで、昭和二年四月にこの碑を立てたものである。その後二十年の歳月の間官憲の目を逃れて、この碑は溝川のほとりにひっそりと立っていた。最近になってその所在が、近藤真柄その他の人々の手によって知らされた。惣三郎がどんな思いをこめてこの碑を刻んだか。このいささか素人っぽい三十一文字の底に埋めこまれている惣三郎の悲傷を、やがて読者も了解されるであらう。

大杉虐殺事件は長く尾を引いた。その年の十二月十六日、谷中の斎場で行われた大杉の

告別式で右翼暴力団下鳥繁造による遺骨奪取事件が起り、又翌年九月一日の震災記念日には、大杉一派の和田久太郎、村木源次郎、古田大次郎等による当時の戒厳司令官福田大将狙撃未遂事件が起った。その他にも甘粕大尉の第五郎がギロチン社の田中勇之進に襲われるという事件もあった。「眼には眼を」というアナキスト達のテロルも、それがテロルだけに容易に官憲に屈服された。時代の趨勢に逆行しようとしたアナキズムもボルシェヴィズムも次第に強権の前に沈黙を強いられる。

福岡県今宿の野枝の実家に引取られた魔子（以後は真子と改めるが）達は、祖父亀吉、祖母ムメの許で恙なく成長し、真子は土地の小学校に入學する。双親を早く失くした彼女は幼ない妹達の面倒をよく見たという。

楠あやめと真子

大正十四年夏九州の代準介を訪ねて、同志の一人岩佐作太郎がやって来る。福田大将狙撃未遂事件で下獄した和田、古田、村木のうち、村木は既にこの年の一月判決を待たずに獄中死したが、残る二人は、古田死刑、和田

無期の判決が下り、兩名とも控訴する意志はなく刑に服するといっている。ついでに面会の度に「一目でもいいからマコに会いたい」と二人ながら申し入れているので、この希望を叶えてやってはもらえまいかというのである。準介は意を決して真子を連れて上京する。九月十二日、真子は準介と共に、古田、和田に市ヶ谷刑務所で面会する。準介の手記にはこうある。

「……先づ古田氏に面会す。死の旬日に迫り居る人に面会するは固より初めてなり、其人の態度予め察したるに実に意外なり、少しも暗き風なく言語爽快、其風格は英雄又は大哲人に比すべく、死の迫れる事関知せざるが如し。真子に向い身体と勉強に注意を与えらる。而して和田氏に面接、是又死を悲しむ風少しも見えず、丈夫の本領を發揮し居たり。滞在四日、此間一夕真子の会の催しあり、会するもの女士、弁護士、思想家あり五十名に達せり。……」

古田大次郎は獄中記『死の懺悔』を残して、真子面会の一月後、同年十月十五日に死刑執行されたし、和田久太郎はポートルランドのあやめに宛てた手紙の中で「至極のんきに

生きられるだけは生きているつもり」と書き

送った言葉に反して、秋田監獄で昭和三年二月二十二日縊死してしまう。こうして大杉にもっとも近かった人々の約半数は、大杉の後を追って非業の死を遂げる。和田にしても、村木にしても、純粹にアナキズムの理論に殉じたと見るよりも、寧ろ大杉との深い人間的連帯感の中に生涯を閉じたと見るべきであらう。その意味では、往古の殉死を彷彿とさせるものがある。

大正十五年四月、人目をしるんでポートルランドからあやめが単身帰国する。横浜入港のプレジデント・セファーンソン号の三等船客の中に交っていたのを、目ざとい新聞記者に見つけられる。

「今度帰りましたのは、身体が悪いので暫らく静養したいと思つたからです。夫はポートルランドの方に残っております。静養した後どうするかは、まだ決めておりません。今後は宗一の墓参りをしたり、兄や皆の冥福を祈りたいと思っております……」

あやめが新聞記者に語つた「兄や皆の……」という皆には、兄嫁の野枝の他に、死刑になつた古田や、源兄ィと呼ばれた村木が含まれ

ていたことは間違いない。

確かに一人児を失くし、心に大きな空洞の生じたあやめは、夫と二人のポートルランドの砂を噛むような毎日の生活に堪え切れずに、単身帰国したのだ。惣三郎とあやめとは、写真による見合結婚であった。惣三郎は若くして渡米し、辛酸を嘗めた末によくよくレストラン経営に漕ぎつけ、三十を過ぎてから、まだ二十に満たないあやめを日本から呼び迎えた。二人を結ぶ絆は宗一一人であった。嵐のような事件が宗一を奪い去り、その中で兄を始めとする主義者達の死を賭した人間的連帯感に触れた時、あやめの心はあやしく揺れた。異境で四面壁に隔てられ、愚痴一つこぼす相手も持たないあやめの心に、俄かにふくれ上って行つたこの動揺を、惣三郎に理解せよといつても、無理だったに違いない。

夫婦の間が罅割れるに手間暇はいらなかつた。

あやめはこうもいっている。「……村木さんの牢死、和田さんの無期懲役、古田さんの死刑——。何れも兄達の死にからまつたことばかりです。これ等のこと

は、数年前までの私の平和な世間並みな生活にとつては、余りに大きすぎる事件でした。短かい月日の間に、大きな大きな石が釣瓶打ちに私の心の中へ投げ込まれました」

激しい動揺の末に、ひたすらに彼女は思いつめる。「同志の人達が可愛がつてその成長を見ていて下さる兄の遺児達……どうしてもあの子達の一人でも私の手で育て上げねばならない。それは私のせめてもの務めだ」と。

果してあやめは静岡の姉の家でしばらく静養した後、福岡の代準介の許へ真子を引取りに行く。同年五月十八日の『朝日新聞』はこんなふう報じている。

「アメリカから帰国した楠あやめは、大杉栄の遺児真子（10）の養育をなしつゝある福岡市外の代準介氏の許へ行っていたが、あやめの婦人が真子をアメリカに連れて行くのが主なる目的であるとなし、当局も注意中のところ、十六日真子を伴つて福岡を出発した。真子は霜降りの夏オーバーに白の帽子をかぶり、同じ洋装した叔母のあやめに手を引かれ、門司まで見送つて来た親戚の者に年にはませた口調で『大きくなつて帰ります』と挨拶

撈っていた。当局においては彼等の挨拶や態度よりして、いよいよ噂の如く真子を連れて渡米するものとの確信を得、関係方面へ通知した模様である。

叔母のあやめが真子を引取って養育したいといったところで、これが主義主張とどんな係りがあるというのだろうか。にも拘らず「当局」は彼女達が杉の余類であるというだけで、その一挙手一投足を監視し、大袈裟に神経をとがらすのである。十歳の真子とはとも角も、あやめの心が大きく運動家達の方へ傾斜したのは、寧ろ当然といえるであろう。

それにしても、あやめが真子を連出した真意は何処にあったのか。「当局」のいうように、アメリカへ連れて帰ろうと考えていたのではないことは確かだ、この時既に彼女は惣三郎との離婚の決意を固めている。肺疾を病んで、その上自分の居所もまだ定まらないあやめが、準介から半ば強引に真子を預ったのは、「宗坊をなくして、どうしてもあの子供達の一人でも私の手で育て上げねば」とまで思いつめていた彼女の考えを聞いた生残りの同志達が、即座に賛成して「何とかして真子を自分達皆の手で一人前にしよう」と誓い

合った言葉が、裏側にあったのではないか。

大杉という支柱を失ったことで、急速に運動のエネルギーまで奪われかけていた残党の人間が、忘れ形見の真子を引取ることによって、新しいトータム・ボールとしようとしたと考えたら、これは穿ち過ぎであろうか。

真子は本来なら大杉と野枝と共に殺されるべき運命にあった。間拔けな憲兵隊が誤って真子と同じ年の宗一を殺してしまっただけで、真子の存在は、強大な国家権力によって圧服を強いられた運動家達にとって、いわば絶やすことの出来ない革命の灯であり、アナキの理想郷への行進の先頭に掲げらるべき旗であり、運動そのものの象徴でもあった、と私は考える。死を目前にした古田や、和田が、誰より先に「マコに一目会いたい」といったのは、真子を通じて己れの生命の向うに、その延長線上に、自分達の理想社会の具現を夢みただけではないか。「この子が大きくなる頃には……」そう思って彼等は泰然と死地に赴いたのである。

初代エマー——即ち生後間もなく牧野田彦松の養女となった真子の直ぐの妹は、その後幸子と改名して彫刻家菅沼五郎夫人として現在

も健在だが、彼女からこんな話を聞いた。

近藤憲二から真子達三人に学費と称して毎月かかさず一人十円宛三十円の金が送られて来た。近藤はそれを「大杉全集」の印税といっていたそうだが、戦争の激しくなる頃までこの送金は続いた。ある時この送金が暫らく途絶えたことがあって、おじいさん（というは代準介のことではないかと思うのだが）が催促の手紙を出した。すると稍あってまた送って来るようになったという。

「きつとおじいさん、無理な七とこ借りしてお金を送ってくれたんだと思いますよ」

幸子さんはそう語っていた。幸子さん達から近藤憲二が「おじいさん」と呼ばれるようになったいきさつは、次に述べる。

ともあれ、これをキッカケとして、真子以後妹達と別れて鶴見の大杉勇の許で暮らすこととなる。

「あやめ斬り」事件

同年六月三日にあやめの後を追って、惣三郎が帰国する。勇はあやめを連れて横浜の埠頭へ迎えに行こうとするが、あやめはどうしても行かないという。それで仕方なく勇は一

人で惣三郎を出迎え、鶴見の家に連れて帰る。

その夜あやめは帰って来ない。彼女は連れて来た真子を労働運動社の望月桂宅に預けて、自分は駒込片町の社会問題研究所へ行って泊ってしまう。社会問題研究所などというと聞えはいいが、近藤憲二の家である。

次の日もあやめが帰らないので、ごうをにやして勇は連れ戻して来る。夫婦の者を奥六畳間に休ませたことで、勇夫婦もホッとしまった。惣三郎の帰国以来九二日会社を休んでしまったので、翌日は早朝から勇は勤めに出た。妻のとみも家を開けて、近所の人と庭先で話し込んでいた。惨劇はその時起る。

何か声高に罵り合う声が聞え、続いてヒューという女の悲鳴が聞えた。とみが家に駆け込んだ時、かみそりを握った惣三郎と咽喉を斬られたあやめと二人共血まみれになって揉み合っている。とみの姿を見た惣三郎が一瞬ひるんだ隙に、あやめは必死で庭先へ逃げた。後を追おうとする惣三郎に、とみは大声を挙げて抱きついた。近所の人達が駆けつけ、惣三郎を押えたが、彼は身をまがきながらかみそりで自分の左右の咽喉を斬った。あやめは血をしたたらせて裸足で三丁も離れた杉

山神社の境内まで逃げ、そこで昏倒する。

二人は直ぐ附近の病院へ担ぎ込まれた。惣三郎は重態、あやめは全治三週間という。惣三郎が復縁を迫り、あやめがそれを拒み、かくて争ううち惣三郎は矢庭に無理心中を計ったのだからと、新聞はいつている。

事件後間もなく、近藤憲二、岩佐作太郎が駆けつける。「警戒のきびしい中をウロウロしていたが、岩佐は『世間でいつているような簡単なものじゃないよ、重大な背景があるんだが今はいえぬ』などと例のように思わせぶりをいい、『時期が来れば発表もする』と何かあるようなことをうそぶいていた」と書かれていた。

新聞記者は真子の泊っている労働運動社の方にもドカドカと押しかける。望月桂の妻女はこう語っている。

「今日労働運動社の方に大勢の記者さんが見えたので、真子ちゃんは何が起ったのかと私共に聞きたがって悩ましています。明日は新聞も見せぬようにせぬと、あの子が可哀そうです……」

二人は無事に命をとりとめたが、惣三郎は入院の儘殺人未遂で起訴される。やがて彼は

首に白い包帯を巻いた姿で横浜刑務所に収容された。あやめはこの事件後近藤憲二との同居生活に入り、真子は子供のない勇夫婦の許から学校へ通うようになる。

当時の新聞はこの事件を「あやめ斬り」と呼んでいる。この年（大正十五年）十月一日、「あやめ斬り」のために惣三郎は懲役一年六カ月の判決を受ける。とすると翌年四月に、名古屋寛玉山にあの宗一の碑を建てたのは、保釈にでもなったというのか、服役中誰かに依頼したのか、あるいは釈放後建てたについて、日付だけ息子の十年目の誕生日を選んだのか、その辺の消息は今となっては一切不明である。

なでし子を 夜半の嵐に た折られて

あやめもわかぬ ものとなりけり

いささか判じものめくが、この歌には、一人子を奪われ、妻に去られ、自身は懲役刑まで受けてしまった四十男の、どこへ恨みの持つて行き場もない苦渋と昏迷が、滲み出ている。

あやめは昭和二年三月、『婦人公論』で自己告白を発表した後、正式に近藤憲二と結婚するのだが、わずか二年で結核が昂じて、四

年五月七日、伝染病研究所病院で同志達に見取られて、薄倅な生涯を閉じる。享年三十歳。

内心の困惑

その後の真子は、大杉勇の下にあって順調に成長する。昭和九年横浜紅蘭女学校を卒業し、その年の夏からは丸内の太平ビルにある日仏同志会に、仏文タイピストとして勤めることになった。女学校時代の真子について、幸子さんはこう語っている。

「姉の紅蘭時代のお友達の中には、やっぱり伊藤さんは暗いところがあつたなんておっしゃる方もありましたが、私は姉妹のせいとか、そんな風には思いませんでした。陽気で笑い上戸でね……。私は牧野田の両親が天津にいたもんで、夏休みというときと母と一緒に鶴見の家に来て泊つてたんです。その頃一緒に歩いてると、『あつ妹のエマちゃんだ、よく似てる』なんて人がいうんですよ。家へ帰って『私達イトコよね』といいながら、二人で鏡を覗いて『何処が似てるんだろう』ってお互いの頬たつつき合つたりしてました」

幸子さんが姉妹だと知つたのは、後に「大杉全集」の最後の頁の大杉の系図を見てからだという。

姉は小説を書くんだといつていた、確か何処かの雑誌に随筆みたいなものを載せたこともある筈といわれて、探し出したのが「父大杉栄の記憶」だが、この文章には十九歳の真子が、まだ自分の生きるべき道をはっきり掴みとつていないことへの焦燥を訴えている個所がある。

「……あの父の子という事を何時も頭に置いて生きて下さいよ、といわれると、何だか私はじつとしていられないような衝動にかられる。……私は時々読みかけの本を放り出してしまいたいような事がある。原稿用紙にいたづらにするすると線ばかり引いているような時、ペンを床にたたきつけてやりたくなくなる……」

十九や二十で進路が定まらないといつて焦れることもなさそうだが、彼女の母親の野枝は十五で単身上京し、十七で辻潤と恋に落ち、十八で『青踏』に最初の投稿をする。

昭和十一年一、二月に、即ち真子二十歳の春、彼女の消息を報ずる新聞記事が二、三ある。一つはこの年の始めに亡くなった祖父の

葬式のために、福岡県今宿に帰郷した際、地元の新聞記者が記した訪問記事、一つは大正八年に林俊衛が画いた大杉の肖像画に真子が対面することになった由を報ずる記事、もう一つは祖父の死をキッカケとして、彼女が東京の勤めをやめて、郷里へ帰ることになったその送別会の記事である。

このうち興味深いのは最初に挙げた訪問記事で、この中には当時の真子の考えていたことと一端が窺える。

黒地の着物に茶の羽織、鹿の子絞りの帯上げを胸高にしてみた彼女は記者にこんなふうにいっている。

「小さい頃は父が大変私を可愛がってくれましたので、父ばかり好きでしたが、近頃は母の夢を時々見ます。やはり女らしくなつたんでしょうかしらね」

結婚適齢期というので、その結婚観を聞かれると、

「今のサラリーマンみたいな人とは絶対に御免蒙ります。第一銀座を通っている男の人達を見ても、みんなニヤけた人ばかりでちつとも頼母しくないので。私はそんな人々大嫌い、静かに考えるような人が好きです。これ

は父や母の著書を読んでいましたから、その影響かも知れません」

それから彼女はフランスに留学して、経済の研究をして、その存在を日本婦人に認識させたいという抱負を語って、

「私は今の婦人団体の活動にあきたりませぬ。私は私自身の正しいと思う方向にしっかりと足取りを進みたいと思ひます」

といっている。恐ろしく切口上で鼻っ柱の強いところは母親の野枝譲りだが、野枝とは根本的に違っているところがある。それは育ちの違いだ。

今宿の瓦職人の娘に生れ、独学で上野女学校を卒業した野枝の二十八年の生涯は、誠に追いつき追いつけぬかのカタマリのような日々であった。『青踏』の編集権をらいてうから略奪するのも、辻潤を捨て、大杉に走るのも、その大杉を堀保子、神近市子に向うに廻して奪い取るのも、また殺される寸前まで甘粕に噛み付いて行くのも、すべて生れ育った環境の中で身につけた獣のような敏捷さと獐猛さであった。五人の子を産み、ようやく人間としてのふくらみが出掛つたところで、彼女は殺される。

それに反して、真子は幼ない時から大杉に溺愛され、両親が殺された後も、同志達からアナキズムの星と崇められた。確かに彼女は生れながらにして、大正年代の或る意味のスターの一人である。そして実力も伴わないうちから「あの父の子という事を頭に置いて生き」るように周囲からいわれて焦れるのである。真子には野枝のような野太さはない。

その証拠には、彼女は祖父の死を機会にフランス留学などあつさり諦めて、日仏同志会をやめて郷里へ帰ることになる。野枝だったらたとえ妹達が野垂れ死をしようとも、フランスへ行くとなつたら行つてしまつただろう。

真子の送別会は、二月二十三日の大雪の中で京橋の八重洲園で開かれた。岩佐作太郎、安成二郎、望月桂、堺真柄等昔の同志二十名が集つて、思い出話に名残りを惜しんだとある。

福岡へ帰つた真子は、福岡日々新聞の婦人記者となつたが、幾許もなく同じ新聞社の神某と職場結婚して、一男三女を産んだ。

戦後二十四年に離婚して、それからは女給したり、外交員したりして、苦勞したらしい

が、六歳年下の博多人形師青木^{ハコ}と再婚して、一男一女をもうける。青木真子となつてからは幸福な日を送つたという。

昭和四十三年十月五日五十一歳で心臓発作のため急死した。

私は「マコの行方」を追つたが、マコは既に他界していた。しかし、私の前にマコの方を追つた人があつて、その人は生前のマコに会つてゐる。「炎の女」の著者岩崎呉夫氏である。「炎の女——伊藤野枝伝」は昭和三十八年刊行だから、死の五年位前の訪問記である。私には、その訪問記の中に出て来る真子の「内心の困惑」というのが、いくらかわかるように思われる。

アナキズムはヒューマニズムの同意語だといつた人がある。この極めて普遍的な、その癖非合法的な、当時の社会体制の中にあつて見れば全く狂気の沙汰とでもいふべき抵抗運動に、生命まで賭して顧みなかったこの小集団のいきさつは、それこそどんなに言葉を費しても、それに関係した者以外の「他人にはわか」つてもらえないものだということを、真子もよく知つていたのである。